福井県立美術館 2026

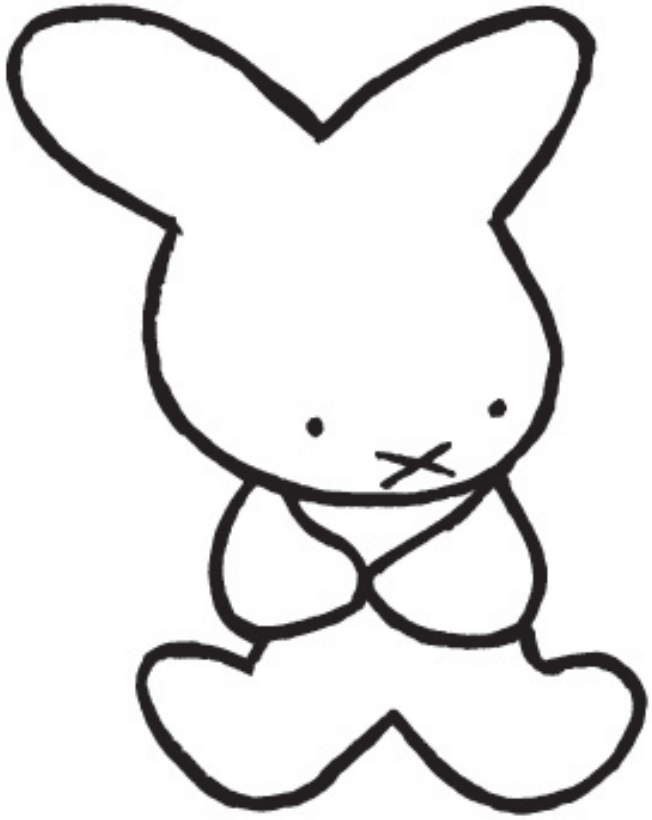
美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.185

contents

〈展覧会紹介〉　特別企画展「誕生 70 周年記念　ミッフィー展」［2～3］
〈イベント報告〉　特別企画展「小野忠弘　―創作の軌跡、新しい光―」［4～5］
〈イベント報告〉　「アートハンター開催報告」［6］
〈報告〉　コレクション貸出紹介
令和 7 年度新収蔵作品紹介［7］
次回展覧会のお知らせ［8］
美術館カフェ・パポテ　メニュー紹介
休館日のお知らせ

表 紙：展覧会ロゴ



70 years
with miffy

© Mercis bv

《展覧会紹介》　誕生70周年記念

ミッフィー展



『うさこちゃんとたれみみくん』2006年 印刷原稿

開催期間

2026年9月19日（土）ー11月8日（日）

休館日：9月28日（月）、10月5日（月）、19日（月）、26日（月）

午前9時～午後5時（最終入場は午後4時30分まで）

※9月19日（土）のみ午前10時～

入場料金

●**当日券**［会期中、展覧会場の発券売場にて販売、現金のみ］

一般…1,500円（1,200円）

高校生…900円（720円）

中小生…600円（480円）

※（ ）内は20名以上の団体。※未就学児は無料。

※障がい者手帳等をご持参の方とお付き添いの方1名は半額。

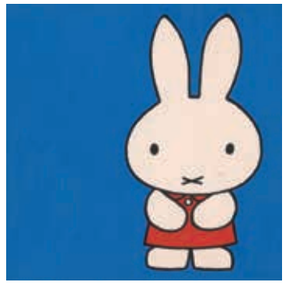
※高校生は生徒手帳の提示が必要です。※学校鑑賞会（対象は福井県内の学校のみ・要申込）は無料。

見どころ1　ミッフィーシリーズの絵本全32作品をたどる

1955年に誕生した『ちいさなうさこちゃん』（初版）から、2009年の『うさこちゃんのおじいちゃんへのおくりもの』まで、ブルーナさんが50年以上にわたって描き続けたミッフィーシリーズ。本展では、全32作品の原画やスケッチを日本で初めて一堂に展示します。素朴な線で描かれたミッフィーが、家族やお友だちとのあたたかいつながりの中でたくさんのことを経験していく様子を、1作品ずつ、みどころたっぷりにたどっていきます。



『ちいさなうさこちゃん』（初版）1955年



『ちいさなうさこちゃん』（改訂版）1963年 原画



『うさこちゃんひこうきにのる』1970年 印刷原稿



『うさこちゃんのゆめ』1979年 印刷原稿



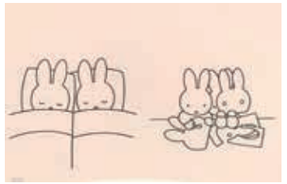
『うさこちゃんとあかちゃん』2003年 印刷原稿



『うさこちゃんのおじいちゃんへのおくりもの』
2009年 印刷原稿

見どころ2　3つの作品から「もっと、もっと」深く知るミッフィー

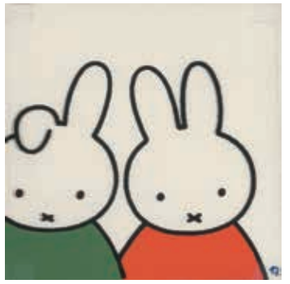
初来日となる『うさこちゃんおとまりにいく』（1988年）、『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』（1996年）の2作品に『うさこちゃんとたれみみくん』（2006年）を加えた3作品からは、特に多くの原画や資料を紹介します。ブルーナさんのデザイン的な冒険や遊び心、おばあちゃんの死をまっすぐに描いた物語、お友だちとの身体的な違いからミッフィーが気づいたことと勇気ある行動。考え抜かれたシンプルな色と線で、子どもたちに対してやさしく正直に向き合って生み出されたミッフィー絵本の大切なエッセンスを感じ取ることができます。



『うさこちゃんおとまりにいく』
1988年 印刷原稿



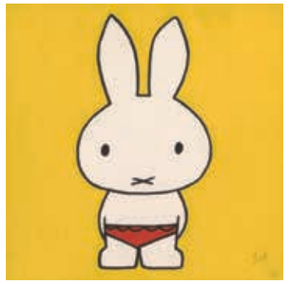
『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』
1996年 原画



『うさこちゃんとたれみみくん』
2006年 印刷原稿

見どころ3　ブルーナさんが読む『うさこちゃんとうみ』を20年ぶりに公開

2005年に開催された「ミッフィー展」で紹介された、ブルーナさんが原語の『うさこちゃんとうみ』を読む映像を20年ぶりに再公開します。やさしく、ときにユーモラスなブルーナさんの声で、原語のオランダ語の物語の響きを味わうことができます。



『うさこちゃんとうみ』1963年 原画

見どころ4　アーティスト、デザイナーとしてのブルーナさん

アーティストを夢見ていた若きブルーナさんが描いた絵画作品をはじめ、父の経営していた出版社でデザインしたペーパーバックの装丁やポスターも展示します。デザインの仕事での挑戦が、ミッフィー絵本に与えた影響にもご注目ください。



〈ブラック・ベア〉シリーズ ポスター 1959年
© Dick Bruna



Photo:F.André de la Porte

作家プロフィール

Dick Bruna　ディック・ブルーナ

（1927-2017）

オランダ・ユトレヒト生まれ。

絵本作家・グラフィックデザイナーとして世界的に活躍。1953年に初めての絵本『de appel(りんごぼうや)』を発表して以来、2017年2月に生涯を閉じるまでに120冊以上の絵本を生み出した。作品は全世界で約50の言語に翻訳され、8500万部以上のロングセラーとなる。

グッズ情報

ミッフィー展オリジナルグッズが500以上。ここでしか手に入らないミッフィーグッズをお楽しみください。

Illustrations Dick Bruna © copyright Mercis bv,1953-2026　www.miffy.com

《イベント報告》

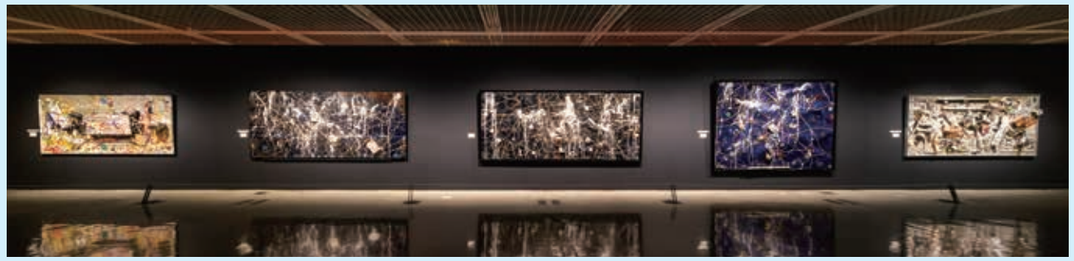
小野忠弘

創作の軌跡、新しい光

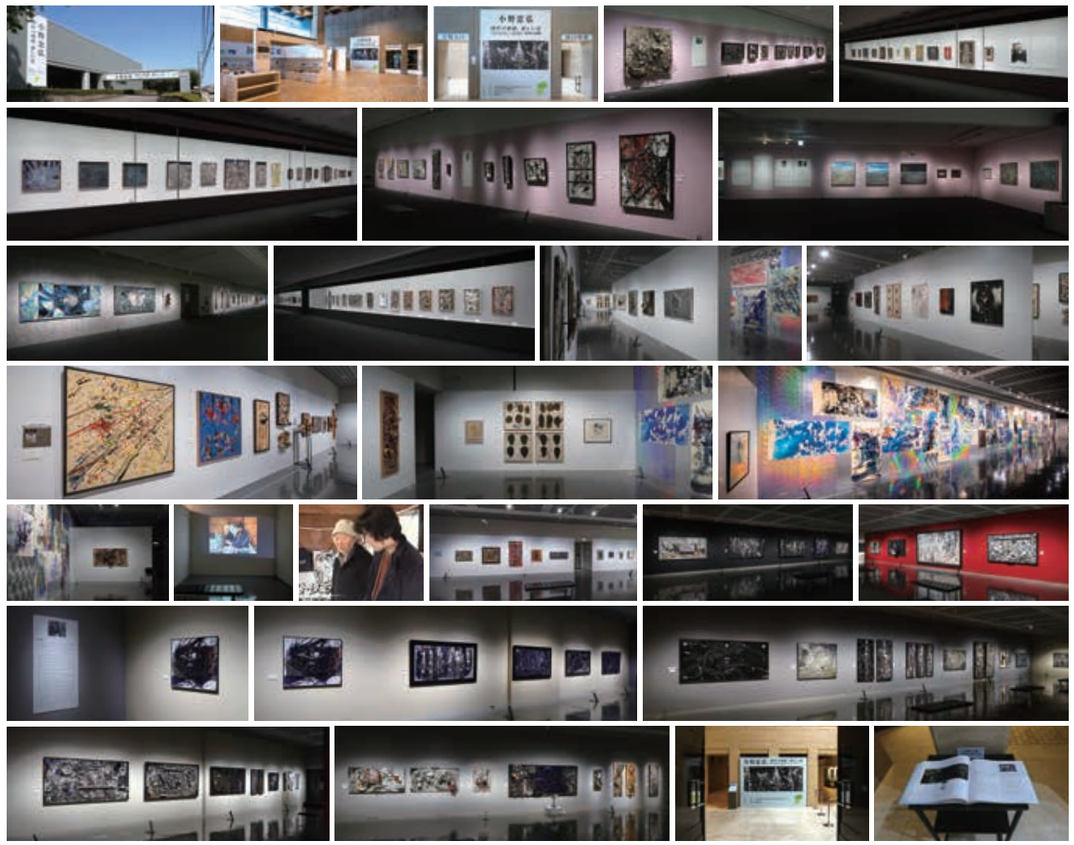
2026年 7月18日(土)～8月30日(日)

［休館日］ 7月27日(月)、8月3日(月)、10日(月)、24日(月)、※30日(日)は大雨の影響により臨時休館

［主　催］ 小野忠弘展実行委員会（福井県立美術館、福井テレビ）
［企　画］ 西村直樹（福井県立美術館）
［演　出］ 戸田正寿（アートディレクター）
［後　援］ 福井新聞社



展示風景　　撮影：舞草社



福井県立美術館では、福井テレビと実行委員会を組織し、7月18日(土)から8月30日(日)までの会期で、特別企画展「小野忠弘　―創作の軌跡、新しい光―」を開催しました。

1913年青森に生まれ42年に福井の住人となった小野忠弘は、2001年に没するまで約70年間にわたって超人的ともいわれるヴァイタリティーを持った制作活動を繰り広げました。その独特の造形意識は、サンパウロ・ビエンナーレやヴェネツィア・ビエンナーレなどの国際的な舞台において高い評価を受けました。80年代後半からは、50年代に制作した半立体作品と60年代中盤から80年代にかけて追求した平面的な絵画表現が融合したかのような強い存在感を持った作品を次々と発表しました。

小野は90年代にはいると「自らが収集してきた美意識の結集化とそれらの境界の探求」を試み、この意識を《BLUE》《Silver》といったシリーズで表現。これらの制作は創作活動の集大成として、2001年8月に作家が亡くなる直前まで続けられました。

小野が没してから四半世紀となる2026年。この年に開催される本展では、全国6館の美術館、所蔵家、関係者等から、貴重な作品・資料をご出品いただき、展示替えを含めて過去最大規模となる計253点を展示。1990年代の小野を代表するシリーズを網羅するとともに、初期から中期にかけての代表作を紹介。併せて、未発表作品や、生前最後となる2001（平成13）年2月17日に撮影された「小野忠弘氏へのインタビュー映像（インタビュアー：西村直樹、カメラマン：黒原繁夫、14分50秒）」を初公開し、小野忠弘の表現の深層に迫りました。

このような小野忠弘の世界を体感するため、県内外から連日、大勢の美術ファンが来館。会期最終日は大雨の影響により臨時休館となりましたが、最終的な入館者数は、6,695人に達しました。

会期中は、日曜日を中心に、学芸員による「見どころ解説会『小野忠弘　創作の軌跡』」を実施。また、「ギャラリートーク『小野忠弘　創作の軌跡、新しい光』」、「トークショー『小野忠弘　創作の軌跡、新しい光』」＋「対談『小野忠弘とは何だったのか』」、「座談会『小野忠弘のクリエティヴ』」、「講演会『小野忠弘って何ものか。中高生に投げかける！』」、「座談会『晩年の小野忠弘を語る』」、「『小野忠弘監督映像作品』＋『小野忠弘少年がステンドグラスを割った日　―神父が授けた魔法の呪文―』上映会」、「先着5名様に本展ポスタープレゼント」等、多くの関連イベントが開催されました。

展覧会に併せて刊行された216ページの図録『小野忠弘　―創作の軌跡、新しい光―』には、1990年代の作品を中心とする245点の作品図版や、テキスト「『小野忠弘の創作活動』概説（西村直樹）」、「『小野忠弘』を語る（西村直樹）」、「対談『小野忠弘』とは何だったのか（戸田正寿×西村直樹）」等が掲載され、好評を得ました。

8月9日(日)には、福井テレビ「タイムリーふくい『心に響く・・・小野忠弘の世界』」が放映。戸田正寿と西村直樹が出演し、小野の創作活動の軌跡や生前のエピソードについて語りました。

このほか、テレビでは、本展のニュース、スポットCM等が数多く放映されるとともに、新聞では、寄稿（福井新聞2回、日刊県民福井1回）、記事、広告等、雑誌では、記事等が掲載されました。

これらの対応の結果、入館者へのアンケートでは、多数の方が「大いに満足・満足」を選択。SNS等でも多くの熱いコメントが寄せられ、複数回来館された方もありました。

当館としては、この展覧会に御来場、御協力いただいたみなさまに対して、厚くお礼申し上げます。

関連イベント

◉「見どころ解説会『小野忠弘　創作の軌跡』」 ※各回約30分間実施

［日　時］ 令和8年7月19日(日)10時30分～、
8月1日(土)13時35分頃～、
8月5日(水)13時頃～、
8月9日(日)10時30分～、
8月16日(日)10時30分～
［場　所］ 福井県立美術館講堂
［講　師］ 西村直樹
（福井県立美術館副館長(学芸)）
［参加人数］ 88名



◉「ギャラリートーク『小野忠弘　創作の軌跡、新しい光』」

［日　時］ 令和8年7月18日(土)
9時30分頃～10時頃
［場　所］ 福井県立美術館展示室
［講　師］ 西村直樹
（福井県立美術館副館長(学芸)）
［参加人数］ 52名



◉「トークショー『小野忠弘　創作の軌跡、新しい光』＋「対談『小野忠弘とは何だったのか』」

［日　時］ 令和8年7月26日(日)
午後2時～午後3時55分頃
［場　所］ 福井県立美術館講堂
［ﾄｰｸｼｮｰ講師］ 西村直樹
（福井県立美術館副館長(学芸)）
［対談登壇者］ 戸田正寿(アートディレクター)、
西村直樹
（福井県立美術館副館長(学芸)）
［参加人数］ 50名



◉「座談会『小野忠弘のクリエイティヴ』」

［日　時］ 令和8年8月2日(日)
午後2時～午後3時10分頃
［場　所］ 福井県立美術館講堂
［登壇者］ 戸田正寿(アートディレクター)、
赤土善蔵(建築家)、
西村直樹(福井県立美術館副館長(学芸))
［参加人数］ 53名



◉「講演会『小野忠弘って何ものか。中高生に投げかける！』」

［日　時］ 令和8年8月16日(日)午後2時～午後2時45分頃
［場　所］ 福井県立美術館講堂
［登壇者］ 西村直樹(福井県立美術館副館長(学芸))
［参加人数］ 40名

◉「座談会『晩年の小野忠弘を語る』」

［日　時］ 令和8年8月23日(日)
午後2時～午後3時30分頃
［場　所］ 福井県立美術館講堂
［登壇者］ 坂本英雄((有)坂本硝子代表)、
佐々木英治
(元福井県立鯖江高等学校校長)、
西村直樹
(福井県立美術館副館長(学芸))
［参加人数］ 51名



◉「『小野忠弘監督映像作品(1970年頃、11分49秒)』＋『小野忠弘少年がステンドグラスを割った日　―神父が授けた魔法の呪文―(5分48秒)』上映会」

［日　時］ 令和8年7月18日(土)
～8月29日(土)
午前9時～午後5時
［場　所］ 福井県立美術館講堂
［参加人数］ 2,731名



◉「先着5名様に本展ポスタープレゼント」

［日　時］ 令和8年7月18日(土)～8月29日(土)
［場　所］ 福井県立美術館エントランスロビー
［参加人数］ 195名

本展を特集し、
会期中複数回放送された
福井テレビの番組
「タイムリーふくい
『心に響く・・・小野忠弘の世界』」



《イベント報告》

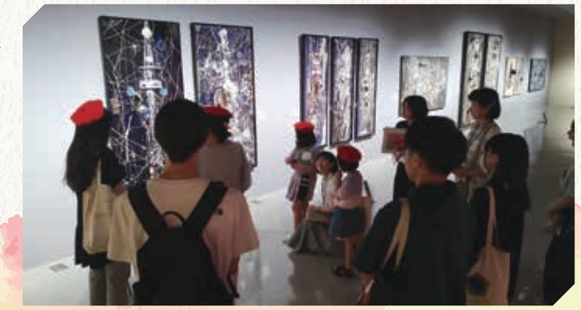
第3回 アートハンター・ワークショップ

日時：令和8年7月25日（土） 10時～11時30分
場所：第4研修室、展示室
協力：福井県立美術館ボランティアの会　参加人数：25名

対話型鑑賞会「アートハンター・ワークショップ」も、今回で3回目を迎えました。対象となった「小野忠弘展」の展示は一見難解な現代美術作品でしたが、今回は「子どもたちが楽しく鑑賞できる工夫」と「運営を担うボランティア会員が負担なくナビゲーターを務められる工夫」の2点に焦点を当てて企画しました。

ワークショップでは、作品を一つの「生き物」に見立てて鑑賞しました。また、ナビゲーターの解説内容を「紙芝居」の形式に落とし込み、読み上げるだけで進行できるようにしたところ、ボランティアの心理的負担が大幅に軽減され、それぞれの課題解決につながりました。

一方で、全館を利用した大規模な展示だったため、移動に時間を要したことや、紙芝居の読み上げで時間がかかってしまったという新たな課題も見えてきました。今後はキーワードをより簡潔にするなど紙芝居をブラッシュアップし、時間短縮を図っていく予定です。



参加した子どもたちからは「同じ“さびしい”という気持ちカードを選んでも、人によって理由が違っていて、お互いの話を聞くのが楽しかった」という声が聞かれました。また、見学で参加した約20名の大学生からも「新しい絵画の見方を体験できた」と好評で、非常に実りのある収穫の多い回となりました。

《報告》

福井県立美術館のコレクションが見られる展覧会



「田辺市立美術館開館30周年記念特別展 小林古径―歴史と物語を描く―」
田辺市立美術館　2026年10月10日（土）～11月23日（月・祝）

明治から昭和にかけて日本画の近代化を牽引し、文化勲章を受章した小林古径（1883～1957）の芸術を紹介する展覧会。古径が生涯にわたり取り組んだ歴史画や説話画を中心に、初期から中期にかけての表現の変遷とその魅力を振り返ります。
当館からは、《妙音》（明治33～40年）および《摂取》（明治38年）が出品されます。



「木村盛和 ―石に託す、結晶の夢―」
福井県陶芸館　2026年10月3日（土）～12月13日（日）

陶芸家・木村盛和（1921～2015）は、「天目の名手」として鉄釉の研究と創作に取り組み、独自の窯変結晶の世界を完成させました。本展では、約75年にわたり作陶と研究に情熱を注ぎ、福井県の文化振興にも貢献した陶工・木村盛和のひたむきな歩みを紹介します。
当館からは、《エメラルド釉窯変結晶茶盌》（平成24年）や《鉄銅釉窯変大壺》（平成7年）ほか、計5点が出品されます。



「没後100年記念　ビゲロー　幻のコレクションと近代日本画の夜明け
――日本美術に魅せられたボストン人」
愛知県美術館　2026年10月30日（金）～12月13日（日）

本展は、明治期の日本美術を支援し、ボストン美術館の日本美術コレクションの基礎を築いたアメリカ人収集家ウィリアム・ビゲロー（1850～1926）の没後100年を記念する展覧会です。ビゲロー旧蔵の肉筆浮世絵をはじめ、彼が支援した狩野芳崖や橋本雅邦らの日本画、さらにビゲローゆかりの資料を通して、日本美術への深い愛情と功績を紹介します。
当館からは、狩野芳崖《伏龍羅漢図》（明治18年）や横山大観《杜鵑》（明治37年）ほか、計5点が出品されます。

令和 7 年度

令和７年度新収蔵作品紹介

令和7年度に新たに購入・寄贈・寄託を受けた作品を紹介します。

購入

菱田春草（ひしだしゅんそう）《落葉（おちば）（試作（しさく））》

紙本著色　六曲一双
各149.7×360.2　明治42（1909）年

東京美術学校（現・東京藝術大学）にて岡倉覚三（天心）の薫陶を受け、新しい日本画を生み出すという大志を抱き、日本美術院の設立メンバーとして活躍、海外遊学を経て、五浦での研究生活の中で自身の芸術を磨いてきた菱田春草（1874～1911）。34歳の時、志半ばで病に倒れ、一時は絵画制作も医者に止められる状態となり、東京・代々木の地で療養生活を送ることとなります。

小康を得ると、近所の雑木林（現・ 明治神宮）を散策し、木々や葉、動物などの自然の写生を描き溜めていった春草は、この写生をもとに、明治42(1909)年の第3回文部省美術展覧会で発表する六曲一双屏風の制作に取り掛かりました。しかし、思うところがあって制作を中断してしまいます。本作品はこの最初に描かれた《落葉》（試作）です。

本作品に見られる土坡は《落葉ノート》（飯田市美術博物館）の構想図にも見られるため、小さなノートでの構想していた時には本作品に近い作品を考えていたものの、大画面に展開した際、より別の構想が生まれたものと考えられます。本作品における実験があったからこそ、その後の《落葉》が生まれ、春草の画業が次なる段階へと進む契機となったのです。

春草はその後、視点や構図を変更した《落葉》（永青文庫所蔵）を制作し、最高賞を受賞。この作品は現在、重要文化財に指定されています。春草は《落葉》と題した屏風作品を計5作品、連続で制作しました。本作品はその最初の六曲一双屏風であり、不朽の名作《落葉》を作り上げるために無くてはならなかった作品と言えます。





寄贈

不詳（S.MATSUNAGAと記載在り）《小津與右衛門氏肖像（おづよえもんししょうぞう）》（付属）小津與右衛門氏写真　小津陽一氏 寄贈

キャンバス・油彩　額装一面　45.4×37.7　昭和3（1928）年

福井県立美術館が開館時購入第1号作として所蔵する《落葉》は、《落葉》5連作の中でも最後の作品であることが判明しています。本作品は、その最後の《落葉》の制作依頼者である小津與右衛門氏の肖像画です。伊勢商人・小津家は江戸期より円山応挙の蒐集家であり、八代目は所蔵の応挙作品を皇居にて天覧するなど、美術愛好家として知られていました。九代目・小津與右衛門（良平）氏は文展会場で《落葉》を見て、制作依頼を行ったと伝わっています。

寄託

平林清輝（ひらばやしせいき）《春秋美人図屏風（しゅんじゅうびじんずびょうぶ）》

紙本金地著色　六曲一双
各169.5×357　昭和15（1940）年

幕末から昭和まで活躍した福井の絵師・菱川師福（ひしかわもろよし）の息子で、仏画や美人画を得意とした平林清輝（1888～1963）の数少ない大作。少女が袂に桜の花びらを集める姿や、脇息に憩う姿などの伝統的な絵画によく見られる様式を用いつつ、大和絵の流れを汲み、桃山時代を想起させる絢爛豪華な装飾表現による美人画を春秋で取り合わせています。

次回展覧会のお知らせ

「Hello Kitty展―わたしが変わるとキティも変わる―」

2027.1.23 Sat → 3.22 Mon
会期中無休

ハローキティは誕生から半世紀を迎え今や世界中で知られ、愛されています。世の中を見渡しても稀な存在と言えるでしょう。なぜそのようになり得たのでしょうか?そのヒントは、実はファンひとりひとりとの関係性にあったのです。

本展では、「キティとわたし」の50年をテーマに、ハローキティだけが持つユニークさをひも解いていきます。さまざまなテーマの展示コーナーや史上最大量のグッズを展示するほか、個性あふれるアーティストとのコラボ作品、オリジナル映像コンテンツ、フォトスポットなど、見どころと体験にあふれた展覧会です。



© 2026 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. L672834



お知らせ

◎2026年10月～12月の休館日について

館内メンテナンス、展示替え等のため下記の日程は休館とさせていただきますのでご了承ください。※■は休館日です。

2026年 10月 October

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

11月 November

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

12月 December

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

美術館のHPはこちら

美術館だより第185号

編 集／発 行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京３丁目 16-1　tel.0776-25-0452　印 刷：小川印刷株式会社